

中国の女子大学生の自立意識に関する心理学的研究 ：《シンデレラ・コンプレックス尺度》と《女性の 社会的役割態度尺度》を用いて

鄭, 艶花
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/3589>

出版情報：九州大学心理学研究. 5, pp.239-246, 2004-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

中国の女子大学生の自立意識に関する心理学的研究 —《シンデレラ・コンプレックス尺度》と《女性の社会的役割態度尺度》を用いて—

鄭 艶花 九州大学大学院人間環境学府

Psychological study on independence consciousness of chinese female university students —Applying Cinderella Complex Scales and of Women's Social Roles—

Yenka Tei (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of this study is to analyze and clarify the independence consciousness of female university students of China applying psychological research methods. In the course of the study a questionnaire research was conducted on eighty three Chinese female university students with regard to the scales of Cinderella complex and the social role attitudes. Firstly the results indicate positive correlations between the independent variable of "defend-family-traditionalism factor" with three factors of dependency, lack of confidence and responsibilities evasion, a particularly strong correlation being found with the dependency factor. Secondly Chinese female students who are the single child of their families showed stronger dependency on their families than those who are not. Finally the number of students who do not choose to find an employment immediately after the graduation is increasing, which shows a correlation with the lack of confidence factor. The findings appear to suggest that as a result of rapid changes in the social environment and public principles Chinese female university students, who have been regarded as having a high level of independence, are beginning to show multi facets that cannot be thoroughly comprehended by the traditional framework of consciousness.

Keywords: chinese female university students, independence consciousness, Cinderella complex, women's social roles

1 問題と目的

1. 自立意識とシンデレラ・コンプレックス

Independenceとは「他者からの影響を受けたり、周りの要求に従ったりするのではなく、自分自身の欲求や知覚、判断に従って行動すること」と定義されている(Vinacke, 1994)。英語のIndependenceは独立、自立として訳されるが、本研究では自立という語を用いる。独立意識(筆者なりの言い方では自立意識)は自己の独立性の状態についての意識や認識である。青年期における身体の発達や知的能力の発達、自我の発達、社会への関心の拡大深化などは青年の独立への欲求を高める。この独立への欲求の強さや、実際の生活の中で独立性が満たされる程度、或いは自己の未熟さや周囲の束縛によって独立性が妨げられる。その程度に応じて、独立意識の内容や水準が変化すると考えられる(加藤・高木, 1980)。

青年期は自立の時代である。これについて、桑原(1990)は青年期を色づける大きなテーマは「独立」であると述べた。女性の自立を内から妨げているものに関して、アメリカのダウリング(1986)は、「個人的・心理的な依存—他者に面倒をみてもらいたいという根深い願望—が今日、女を押さえつけている主力である」と述べ、これをシンデレラ・コンプレックスと名づけた。彼

女も自立を妨げるものは外部の妨害ではなく、自立を恐れる女性自身のところの中にあることを指摘した。そして、「依存欲求(a dependency need)」、「愛されたい欲求(the desire to be loved)」、「女らしさ」を伝統的ステレオタイプとして提示した。このステレオタイプは良きにつけ、悪しきにつけ、女性の自立意識や行動に影響を及ぼすものである。落合(1984)は、シンデレラ・コンプレックスは自立を求めようとしているすべての女性の中にひそむものであり、その中心にあるのは依存心であると述べている。

ちなみに関(1985)によるとコンプレックスは、非常に強い感情的な色合いをおびえた観念群のことであり、部分的または全面的に意識下に抑圧されているものである。そのまま自我に統合されて落ちついていることもあるが、たえず意識の上に出ようとして、本人を悩ましたり苦しめたりして、人の行動や態度に影響を与えることが多い。

2. 中国における女性の自立と自立意識

これまでの歴史は、女性にとって「自立のための戦い」の長い歴史だったと言える(天野, 1979)。時代の発展とともに、女性の思想、観念、意識も変化しつつあり、心理的欲求も変化している。封建社会の中国は、男尊女卑

社会であり、「独身の時は父に、結婚したら夫に、夫に死なれたら子に従う」などの「三従四徳」の旧思想のなかで、女性は経済的地位、社会的地位がない依存的な人生を送っていた。女性は「従う」「依存する」という存在に過ぎなかったのだといえる。1949年の中国建国以来、中国の女性は国の発展とともに改革開放の順風に乗れ、封鎖から開放へ、依存から自立へと変化を遂げてきた。時代の発展により、1980年代、1990年代頃の中国女性のイメージは、一言で言えば、「男女共働き」である。「男女平等」の強い宣伝効果と女性解放の政策、女性4期（生理・妊娠・出産・授乳）の保護制度により、女性が男性と肩を並べて働くことになった。中国国家统计局（2000）による1990年～1998年までの男女別従業員状況をみると、1990年は女性45%、男性55%、1995年は女性45.7%、男性54.3%、1998年は女性46.7%、男性53.3%となっている。

中国では計画経済により、計画的に着実に「全民就業」が推進されてきた。このように政治レベルで望ましい女性の生き方のモデルが提示され、宣伝され、それに乗り、中国女性の自立、特に経済的自立と社会的自立及び男女平等へ向け成果が挙げられてきた。ところが、このような成果をあげることの一方で、改革開放とともにいろいろな新しい問題が生じ、悩む女性も少なくない。1988年の中国の第六次婦女代表大会は、「自尊・自信・自立・自強」という「八文字精神」を全国の女性に呼びかけた。益々激しくなる市場競争の中で発想を転換し、新しい挑戦をしていくことが当面の急務である、と女性労働者に対する指摘がなされた。伝統的価値観と現代的価値観が共存する時代により、女性の生甲斐には、大きな混沌とさまよいが生じている。中国婦女雑誌（中国婦女雑誌社、2002）によると、中国の都会では、「女性は家に戻るべきか」という問いかけが再びなされ、大きな反響をひき起こしている。このような問題の再提起に伴い、「自立意識」が中国の女性にとって大きな関心事となってきた。

市場経済化による中国経済の急速な発展とともに、激しい競争を背景とし、「現代知識女性の自信が低下しつつある」し、「伝統女性への回帰現象」が台頭している（<http://www.china-woman.com>）。「家に戻るべきか」という問題が再び人々に提起されたことは、女性の現在の心理的变化と心理的葛藤を反映していると考えられる。

3. 中国の女子大学生の自立意識とシンデレラ・コンプレックス

女性が出会う問題状況は、ライフサイクルのそれぞれの段階で異なるが、どの段階であれ、めざすところは自立した生活者として生きていくこと、生きていける社会を創り出すことである（天野、1979）。岡本（1994）は、「成人早期」は初めて自分の自由意志で行うことが可能に

なってくる時期であり、言い替えば重い責任を自分自身で取らねばならない大人の時代に入ってくるのであると述べている。レヴィンソン（1980）も、「成人初期」であり「大人の世界へ入る時期」である22歳から28歳については、自立した大人としての生活に向けての「生活構造」を作っていくこと、職業・異性・仲間関係・価値観・生活様式など初めて選択したものへの試験的関与を行うこと、人生の「夢」への展望を持つことであると述べている。

ところで、精神分析用語のシンデレラ・コンプレックスは、アメリカでベストセラーになった「シンデレラ姫」の童話にちなんでいるが、この童話は中国の子どもたちにも大人気となっている。女の子には、大きくなったら素敵王子様によって自分の人生を守られたいといった「シンデレラ姫」願望がある。ところが、大学に入ると、高等教育を受けて社会的地位も高くなる。そして卒業を迎え、知識女性として、厳しい現代の競争社会で、仕事と家庭の両立をどのように担っていくのかという現実的問題に直面するのである。

福島（1992）は、人の発達段階における親からの心理的分離について、大学生時代の男女にはあまり性差は見出されないと述べている。しかし、青年期後期から成人期前期の移行段階にある女子大学卒業者が持っているこれからの社会的役割態度意識は重要な問題と言える。女性は男性より、はるかに感情を大切にし、愛に生きようと願う人が多い（秋山、1988）。

長い女性の歴史において、シンデレラ・コンプレックスを抱いてきた女性のなかで、「高学歴女性」になった女子大学生の今後の社会的な自己実現やそれを通しての社会的役割態度は、自立意識と深く関わりがあるように思われる。

尚、中国の特有な社会現象として、今の女子大学生の多くは、一人子政策の下で、兄弟がいないという特殊な環境の中で成長し、親から「掌中の珠」として可愛がられて育てられてきた世代である。このような状況の中で育ってきた彼女達にとっては、「自立意識」はどのようなものなのであろうか。ちなみに山下（1954）は、一人子は絶えず母親の保護と監視のうちのみ生活している結果、依頼心が強く、自分で実際の事柄にぶつかったとき、これを処理することがうまくできないと述べている。

このような心理をもっている一人子が青年に成長したときの自立に関する心理学的研究はあまり見当たらない。一人子による少子化、高齢化を迎えている今日、社会発展の半分を担っていくべき女子大学生の自立意識について研究することは、必要でかつ有意義なことではないかと考えられる。

4. 本研究の目的

中国では、高等教育の普及により女子大学卒業生が増加し、女性の社会進出が進み、生き方もさまざまに選択できる時代に入りつつある。「共働き」により、女性の自立意識が高くなったように見える。ところが、依然としてその自立意識をめぐる問題は残っていると考えられる。

本研究では、一人子である中国女子大学生の自立意識（女性の社会的役割態度と深い関連がある）がどのようなものであるかを、シンデレラ・コンプレックスとの関連で、分析し、明確にすることを目的とする。

II 方法

質問紙の構成

本研究で使用された質問紙調査のための質問紙は、A, B, Cの三種類から構成されている。

- (1) 質問紙Aは、年齢や理想とする「ライフスタイル」についての質問などからなる《フェイスシート》であり、全部で8項目の質問を有する。
- (2) 質問紙Bは、落合(1984)が、ダウリングの記述をもとに作成した《シンデレラ・コンプレックス尺度》—依存・女らしさ因子、自信のなさ因子、責任回避因子の18項目について、6件法（1.まったくそう思わない、2.かなりそう思わない、3.ややそう思わない、4.ややそう思う、5.かなりそう思う、6.非常にそう思う）で回答—を因子分析し、因子を抽出した質問紙である。
- (3) 質問紙Cは、若林・鹿内ら(1981)によって作成された《女性の社会的役割態度尺度》—家庭、職業、市民の三つの領域にわたる役割に対する女性の伝統主義と進歩主義の態度が短い文章で提示された21項目に対し、7件法（1.非常に反対、4.どちらでもない、7.非常に賛成）で回答—を因子分析し、因子を抽出した質問紙である。

質問紙の翻訳

筆者は質問紙を、日本語版から中国語版に翻訳し使用した。筆者は大学にて4年間日本語を専攻し、8年間日本の会社で日本語の翻訳、通訳などの仕事に従事したことがある。そして、翻訳した中国文の妥当性を確認するために、日本語が堪能な心理臨床分野の（中国からの）大学院留学生2名に日本語版を中国語版に翻訳してもらい、筆者の翻訳文とダブル確認をし、最適な中国文を確定した。

調査対象と調査時期

調査対象は中国にある某大学4年生の女子大学生（年

齢は22歳から23歳）である。調査人数は83人で、A大学41名とB大学42名である。調査は、2002年9月上旬に行われた。中国語版の質問紙を女子大学生達に配布し、翌日回収を行った。

データの分析方法

データの分析方法としては、①《シンデレラ・コンプレックス尺度》と（自立意識と深い関連がある）《女性の社会的役割態度尺度》の相関をみる、②一人子群、非一人子群の《シンデレラ・コンプレックス尺度》と《女性の社会的役割態度尺度》の相関の違いを探る、③卒業後すぐの就職希望者／非就職希望者の違いによって、《シンデレラ・コンプレックス尺度》と《女性の社会的役割態度尺度》の相関の様相に相異があるかどうかを検討する。

III 結果

1. 質問紙の因子分析

(1) 《シンデレラ・コンプレックス尺度》（以下C・C尺度）の因子分析

質問紙Bの得点についてエカマックス回転による主成分分析を行い、初期値から共通性が0.25以下と低かった項目を削除し、再度分析した。その結果、14項目を選択し、自立意識に影響を及ぼす心理的要因として「依存・女らしさ」「責任回避」「自信のなさ」の3因子を抽出した（Table 1）。

(2) 《女性の社会的役割態度尺度》（以下S・S尺度）の因子分析

質問紙Cの得点についてエカマックス回転による主成分分析を行い、初期値から共通性が0.25以下と低かった項目を削除し、再度分析をした。その結果、12項目を選択し、女性の自立意識に関わる社会的役割態度尺度より「家庭を守る伝統主義」「社会参加の進歩主義」の2因子を抽出した（Table 2）。

2. 2つの尺度の相関係数

(1) 《C・C尺度》と《S・S尺度》の相関

《C・C尺度》（「依存・女らしさ」「責任回避」「自信のなさ」といった自立意識に影響する心理的要因で構成されている）と、《S・S尺度》（「家庭を守る伝統主義」「社会参加の進歩主義」といった女性の自立意識を社会的見方として表現している）との関係を検討するため、ピアソンの2変量相関分析を行った（Table 3）。

まず、《S・S尺度》の「家庭を守る伝統主義因子」と《C・C尺度》の「依存・女らしさ因子」、「責任回避因子」、「自信のなさ因子」の3因子との相関係数を求めた。その結果、「家庭を守る伝統主義因子」と「依存・女ら

Table 1
《シンデレラ・コンプレックス尺度(C・C尺度)》の因子分析結果

因子名及び質問項目	F1	F2	F3	共通性
第1因子 依存・女らしさ因子 ($\alpha=.7986$)				
9 自由でありたい一方で、守られていたいと思う	.836			.693
10 寄りかかれる相手が欲しいと思う	.808			.715
12 他の人から守られている存在でありたいと思う	.796			.639
11 女性には面倒をみてくれる人がいると思う	.746			.669
15 困難にぶつかるたびに男性の助けを求めたいと思う	.340	.322		.474
16 人から暖かい気持ちで接してもらいたい	.312	.258		.321
7 自分について過少評価することが多いと思う	.302		.258	.293
第2因子 責任回避因子 ($\alpha=.7107$)				
18 「任せてください」と言い切れないところがある		.750		.664
17 責任のあることを引き受けるのが苦手である		.732		.525
8 責任のあることを引き受けるのが苦手である		.601	-.348	.379
第3因子 自信のなさの因子 ($\alpha=.6590$)				
3 自分の中にいつもびくびく頼りないものを感じる			.722	.349
2 ひとりで居るとき、心の支えを失い、根無し草のような自分を感じる		.481	.511	.519
6 自分は自由を望んでいるが、感情的にはふっさけない	.257	.268	.483	.376
14 私は人がいないと寂しいので、いつも一緒にいたい	.381	.406	.407	.474
累積寄与率				45.678%

Table 2
《女性の社会的役割態度尺度(S・S尺度)》の因子分析結果

因子名及び質問項目	F1	F2	共通性
第1因子 家庭を守る伝統主義因子 ($\alpha=.6914$)			
28 女性には家庭を守り、子どもを育てること以上に重要な役割は期待されていない	.726		.545
21 よい妻よい母親になることが女性にとって人生最大の目的である	.562		.464
25 職場で男性と同じように頑張っ働くかねばならない女性は結局不幸な女性といわねばならない	.531		.374
29 夫が外で働き、妻が家にいて家事を行うと言う形は男女のそれぞれの特性に適したものである	.520		.341
27 家庭がみんなの憩いの場となければ主婦としては失格である	.401	.361	.283
24 もともと女性は男性に比べ、仕事に必要な能力が劣っている	.350		.262
第2因子 社会参加の進歩主義因子 ($\alpha=.6313$)			
35 女性が外で働く場合は、家族で迷惑や不都合をかけない範囲にしておくべきだ		.728	.458
36 女性は仕事を持っているからといって、自分の夫に掃除や皿洗いなど断じてさせるべきではない		.564	.363
23 女性が家庭に閉じこもりそこでささやかな幸福に甘んじていれば社会から取り残されるだけである		.456	.251
22 自分の能力や可能性を社会のために役立たせることは女性としての義務の一つである		.389	.343
34 女性が何らかの社会参加を通じて家庭の外にある世界と積極的なつながりを持つべきである	-.312	.347	.314
33 男性と対等に議論できるような知識や思考力が女性にも必要である	-.317	.336	.298
累積寄与率			39.369%

Table 3
《C・C尺度》と《S・S尺度》との相関分析結果

		依存・女らしさ因子	責任回避因子	自信なさ因子
家庭を守る伝統主義因子	Pearsonの相関係数	.386**	.215*	.278*
	有意確率	.000	.025	.006
	N	83	83	83
社会参加の進歩主義因子	Pearsonの相関係数	-.034	-.210*	.006
	有意確率	.379	.029	.479
	N	83	83	83

** P<0.01 * P<0.05

Table 4
一人子群/非一人子群の《C・C尺度》と《S・S尺度》との相関分析結果

		一人子群			非一人子群		
		依存・女らしさ因子	責任回避因子	自信なさ因子	依存・女らしさ因子	責任回避因子	自信なさ因子
家庭を守る伝統主義因子	Pearsonの相関係数	.440**	.192	.271	.310	.252	.284
	有意確率	.001	.176	.055	.084	.164	.115
	N	51	51	51	32	32	32
社会参加の進歩主義因子	Pearsonの相関係数	.131	-.262	.077	-.155	-.141	.005
	有意確率	.358	.069	.589	.398	.441	.980
	N	51	51	51	32	32	32

** P<0.01 * P<0.05

しき因子」とは.386 (P<.01), 「責任回避因子」とは.215 (P<.05), 「自信のなさ因子」とは.278 (P<.05) と三つの因子とも有意な正の相関が見られた。

次に《S・S尺度》の「社会参加の進歩主義因子」と《C・C尺度》の「依存・女らしさ因子」, 「責任回避因子」, 「自信のなさ因子」の3因子との相関係数を求めた。その結果, 「社会参加進歩主義因子」と「責任回避因子」とは-.210 (P<.05) と有意な負の相関が見られた。そして, 「社会参加進歩主義因子」と「依存, 女らしさ」, 「自信のなさ」との相関係数を計ったが, 有意な相関が見られなかった。

(2) 一人子と非一人子群の《C・C尺度》と《S・S尺度》の相関

データを一人子群と非一人子群に分け, それぞれ《S・S尺度》と《C・C尺度》の相関係数を求めた (Table 4)。まず, 一人子群の得点を集計し, 《S・S尺度》の「家庭を守る伝統主義因子」と《C・C尺度》の「依存・女らしさ因子」, 「責任回避因子」, 「自信のなさ因子」の3因子との相関検討を行った。その結果, 「家庭を守る伝統主義因子」と「依存・女らしさ因子」とは.440 (P<.01) と有意な正の相関が見られた。しかし, それ

以外の「責任回避因子」, 「自信のなさ因子」とは有意な相関が見られなかった。《S・S尺度》の「社会参加の進歩主義因子」と《C・C尺度》の「依存・女らしさ因子」, 「責任回避因子」, 「自信のなさ因子」との相関係数を計ったが有意な相関は見られなかった。

次に, 非一人子群の得点を集計し, 《S・S尺度》の「家庭を守る伝統主義因子」と「社会参加の進歩主義因子」をそれぞれ《C・C尺度》の「依存・女らしさ因子」, 「責任回避因子」, 「自信のなさ因子」の3因子との相関係数を求めてみたが, いずれにも有意な相関が見られなかった。

(3) 卒業後すぐの就職希望者/非就職希望者の違いによる《C・C尺度》と《S・S尺度》の相関

(質問紙Aに記述された) 卒業後すぐの就職希望者の理由は, 「経済的に自立したい」と答えた女性が34人で一番多く, 「自分の能力を生かしたい」と答えた女性が23人と次に多かった。また非就職希望者の理由は, 「家事・育児や通学などで忙しい」と答えた女性が33人と一番多く, 「自分の知識・能力に自信がない」と答えた女性が23人で, 二番目と多かった。

そこで就職希望理由で最も多かった, 「経済的に自立

Table 5
卒業後すぐの就職希望者／非就職希望者の《C・C尺度》と《S・S尺度》との相関分析結果

		就職希望者			就職非希望者		
		依存・女らしさ因子	責任回避因子	自信なさ因子	依存・女らしさ因子	責任回避因子	自信なさ因子
家庭を守る伝統主義因子	Pearsonの相関係数	.323	.232	.254	.461*	.291	.404*
	有意確率	.063	.187	.148	.027	.178	.056
	N	34	34	34	23	23	23
社会参加の進歩主義因子	Pearsonの相関係数	-.037	.194	.203	-.180	-.263	-.054
	有意確率	.838	.27	.250	.411	.225	.807
	N	34	34	34	23	23	23

* P<0.05

したい」と答えた34人について、《C・C尺度》と《S・S尺度》との相関係数を求めた (Table 5)。その結果、「経済的に自立したい」を選択した女子大学生の《C・C尺度》と《S・S尺度》の間には有意な相関が見られなかった。

次に非就職希望理由で「自分の知識・能力に自信がない」と二番目に回答が多かった23人の《C・C尺度》と《S・S尺度》との相関係数を求めた (Table 5)。その結果、「依存・女らしさ因子」と「家庭を守る伝統主義因子」の間に.461 (P<.05) と有意な相関が見られた。また、「自信のなさ因子」と「家庭を守る伝統主義因子」の間にも.404 (P<.05) と有意な相関が見られた。ところが、「責任回避因子」と「家庭を守る伝統主義因子」とは相関が見られなかった。

IV 考 察

1. 《C・C尺度》と《S・S尺度》の相関について

今回は中国女子大学生の自立意識を研究するために、その分析視点として、＜伝統的態度＞と関係がある「シンデレラ・コンプレックス」と＜進歩的態度＞と関係がある「女性の社会的役割態度」を取り上げた。その結果、女性の役割態度の「家庭を守る伝統主義因子」と「シンデレラ・コンプレックス尺度」の「依存・女らしさ因子」、「責任回避因子」、「自信のなさ因子」3因子との間に有意な正の相関が見られている。これは、家庭を大事にする＜伝統的態度＞は、まさにシンデレラ・コンプレックスの心性と密接に結びついていることを示していると言えよう。つまり、女子大学生の内なるところにはシンデレラ・コンプレックスが存続していることが考えられる。

ところが、「社会参加の進歩主義因子」は「依存・女らしさ因子」と「自信なさ因子」の双方とは有意な相関が見られなかったが、「責任回避」因子とは負の相関

がみられた。これは、社会参加を大事にする＜進歩的態度＞はシンデレラ・コンプレックスの心性とは関係性が弱く、むしろ「責任回避」とは正反対の心性を持っていることを示していると言えよう。このように、責任感が示される結果となった理由としては、1949年中国建国後、女性解放のための政策、つまり、「男女平等」の強い宣伝の中で男性と肩を並べて働くことを通じて社会参加をすることを望むようになった中国女性の高い自立意識が示されたと考えられる。そして、これは、主に労働を通じて経済的自立を得ることが女性の責任の一つだと考える「社会責任感」に対する教育が行われたことの効果であろうと推定される。

2. 一人子と非一人子群の《C・C尺度》と《S・S尺度》の相関について

一人子群において、「家庭を守る伝統主義因子」と「依存・女らしさ因子」の間には有意な正の相関が見られている。

尚、この相関値0.440は Table 3 に示された相関値0.386より高い。これは一人子群の＜伝統的態度＞は、女子大学生の（一人子群と非一人子群を一緒にした）一般群より、シンデレラ・コンプレックスの心性と強く結びついていることを示していると言えよう。これに対し、非一人子群では「家庭を守る伝統主義因子」と「依存・女らしさ因子」の間に有意な相関は見られない。これは、非一人子群の＜伝統的態度＞はシンデレラ・コンプレックスの心性とは関係性が見られないと言えよう。つまり、一人子群と非一人子群では、＜伝統的態度＞と結びついている心性の様相が異なるのである。

こうなったのは、一人子は両親のたった一人の子どもであることから親の寵愛を一身に集めており、兄弟がないことから親、家庭への依存が比較的に高くなることと関係しているように思われる。自立意識を妨げる依存

性は、非一人子群より一人子群が高いとも言えるだろう。

そして、一人子群、非一人子群両群とも「家庭を守る伝統主義因子」と「責任回避因子」、「自信なさ因子」の間には有意な相関が見られなかった。つまり、両群の「伝統的態度」に影響を与えている要因としては、「依存・女らしさ因子」が「責任回避因子」「自信なさ因子」より関係性が強く、シンデレラ・コンプレックスの中心となる「依存因子」との関係性の有無が大きいと言ってよからう。

次に「社会参加の進歩主義因子」を見ると、一人子群も非一人子群も《C・C尺度》の3つの因子との間には有意な相関が認められない。ということは、一人子群も非一人子群も「進歩的態度」は、シンデレラ・コンプレックスとは無縁であることを示していると言ってよからう。

こうなったのには、次のような事情が関係しているように思われる。改革開放により、中国の経済は計画経済から市場経済化、商業化社会、自由競争社会へと転換し、その発展の勢いは世界の人々の注目を受けるようになった。市場化程度は79年の25%から現在は85%に達している (<http://www.china-woman.com>)。それで、それまでのような平穏無事に暮らし、毎月給料をもらう「鉄飯碗」(食いはぐれのない、解雇されることのない確かな職業、親方日の丸)が崩壊しつつあり、女性も「国への依存」「国営企業への依存」から意識的に経済的自立と社会的自立を求めるようになってきた。

3. 卒業後すぐの就職希望者／非就職希望者の違いによる《C・C尺度》と《S・S尺度》の相関について

落合(1990)は青年期の社会化に関する発達課題の一つとして職業的社会化をあげている。そこで、本研究では、就職希望の有無を自立意識の一視点として検討した。その結果、就職希望者の「家庭を守る伝統主義因子」は、《C・C尺度》の3つの因子との間には有意な相関が認められない。ということは、就職希望者の「伝統的態度」は、シンデレラ・コンプレックスとは無縁であることを示していると言ってよからう。それに対し、非就職希望者の「家庭を守る伝統主義因子」と「依存・女らしさ因子」、「自信なさ因子」との間には有意な相関が見られる。

尚、非就職希望者の相関値0.461, 0.404とも Table 3 に示された女子大学生一般群の相関値より高い。これは、非就職希望者の「伝統的態度」はシンデレラ・コンプレックス心性とかなり結びついていることを示していると言ってよからう。つまり、「伝統的態度」において、非就職希望者が就職希望者及び女子大学生の一般群よりシンデレラ・コンプレックス心性が高いと考えられる。言い換えると自立意識を妨げる依存性も非就職希望者が高いと言ってよからう。

次に、就職希望者と非就職希望者の「社会参加の進歩主義因子」と《C・C尺度》の3つの因子との相関係数を求めたが、有意な相関がみられない。ということは、就職希望者、非就職希望者の両群の「進歩的態度」は、シンデレラ・コンプレックスとは無縁であることを示していると言ってよからう。その理由としては、考察2の一人子群と非一人子群の「進歩的態度」がシンデレラ・コンプレックスと無縁であった理由と同じであると考えられる。

ところで、これまでの大学生は卒業後にすぐ就職することに大きな期待と注目をしてきた。しかし、今回の調査を通じて、中国女子大学生の中には、卒業後すぐの就職を希望しない者が増えていることが示された。これは、自立へのモラトリアムの期間を持つようになったとも考えられるだろう。

付記

本論文は研究生論文をまとめ、加筆修正したものである。本論文作成にあたり、丁寧にご指導いただきました指導教官の野島一彦先生、そして副指導教官の福留留美先生に感謝申し上げます。また、調査にご協力頂きました中国の方々と、分析の際に貴重なご助言を頂きました研究室の先輩方に心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 秋山さと子 1988 女性論, 福村出版
 天野正子 1979 第三期の女性—ライフサイクルと学習, 学文社
 天野正子 1982 転換期の女性と職業—共生社会への展望, 学文社
 中国婦女雜誌社 2002 中国婦女, 中国婦女雜誌出版社
 中華人民共和国統計局 2000 中国統計年鑑, 中国統計出版社
 ダウリング, C. 1986 柳瀬尚紀(訳)シンデレラ・コンプレックス, 三笠書房
 福島朋子 1992 思春期から成人にわたる心理的自立—自立尺度の作成及び発達の検討, 発達研究, 8, Pp67-86.
 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係, 教育心理学研究, 28, Pp36-86.
 桑原知子 1990 青年期の女性の自我同一性—氏原寛・東山弘子・岡田康伸(編)—現代青年心理学, 培風館, Pp61-62.
 岡本裕子 1994 ライフサイクルの理論と女性, 福村出版
 落合幸子 1984 人生の転換期の心理Ⅳ—女性の中の

- シンデレラ・コンプレックス, 常葉学園大学研究紀要, 5, Pp117-125.
- 落合良行 1990 青年期の課題—斎藤耕二・菊地章夫(編)—社会化の心理学, 川島書店 Pp217-219.
- レヴィンソン, D.J. 1980 南博(訳) 1985 人生の四季, 講談社
- 関 計夫 1985 コンプレックス, 金子書房
- Vinacke, w.e. 1994 Independent personalities, Iucorsini, R.J. (Ed.), Encyclopedia of psychology (2nd, Vol, 2), John Wiley & sons, Pp222-223.
- 若林満・鹿内啓子・後藤宗理 1981 女性の社会的役割態度と職業自己イメージ, 28, 71-98.
- 山下俊郎 1954 一人子の心理と教育, 巖松堂書店